

江戸時代の相撲

相撲興行が流行して庶民の人気に

江戸時代 幕府が興行として開催された相撲
江戸時代前期 職業として相撲を取る力士が
自分たちの生活のために何ものにも関わらず
興行主催する**角力会所**と呼ばれる団体が
各地にできた。
都市で行われる相撲興行ではよくはんかひがきた

力士を監督する人を設けた

江戸時代前期 京都・大坂(大阪) 相撲興行が
江戸時代中期 江戸(東京) へ移る
江戸相撲の力士 年に4回(江戸2回 京都・大坂で各1回)

本場門 定期的に開催される

1791年 江戸城で將軍の前で相撲が行われたあと
相撲は栄えた。

相撲興行は江戸の庶民の
大きな楽しみのひとつとなった

角力(すもう)

江戸時代の庶民には相撲の漢字は
読みかたの「すもう」と書く時には「角力」という文字を
使っていた。昭和時代初期まで続いた。

見江戸時代に相撲観戦が庶民の娯楽としてひろまったことが分かった。どんな暮らしをしていた
学のかな? 岡崎市美術博物館で江戸の歴史と文化を 実際に体験し感じてきました。

相撲のくみが整えられる

江戸時代前半 相撲のくみが整備された
土をつめた俵を置いて境界線をつくること→土俵

決まり手を決める
禁じ時 反則 もはきりさせる
相撲試合の伝統を受けた格式高いものであることを
示すための作法を取り入れた

相撲部屋
親方のシステムが生まれた



横綱かめる横綱は
もともとのくみを
巻いた日に巻いた
説もある

18世紀末の相撲興行の様子
屋外に屋根のついた土俵がメダレ、
晴れの日に開催された。
一場10分ほど
雨で中断されると1か月以上かかることもあった。

横綱誕生

江戸時代前期で カシの階級ができた
大関(最高の地位) 関脇 小結

江戸時代中期 大坂で優れたカシが
黒と白の綱をより合わせた**横綱**を
巻くことが流行した。

その後 谷風と小野川というカシが
白い綱を巻いて、**注連縄(ぬまなわ)**につける
紐通して入った紐を付けて土俵入りをして
大評判になる。この土俵入りは、度だけの
特別に行われたものだったが、後に、人気と実力のある
カシが横綱土俵入りをするようになって
横綱は、大関より上の階級をさすようになった。

谷風の髷綱
(4代横綱)

江戸時代のカシ

有名な大名カシスポンサーに
カシは大名家の屋敷の出入り番として化粧まわしをもち
た。この地位が上ったカシは、挨拶米(挨拶としてまわす米)も
もちました。

御免札



江戸時代の相撲興行では
幕府の許可を得るという
しるしに**御免札**をここの
書かれた御免札を立てて、
今の相撲でも本場所の時に
御免札を立てる。

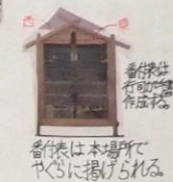
東西に分かれている理由

江戸時代にカシをかえる大名が
東西に分かれていたこと由来している。
194年(昭和39年)までは

東西に分かれて競う団体戦だった



中日新聞 6月19日
高さ4メートルほど
札は他に日経などが
書かれている。



御免札は本場所
でかまに掛けられる



カシの階級が目で
分かるもの。
行司・叫出床山・審判員など
大相撲を支える人たちの姿も
写っている。
本場所の最も新しいものが
立てられる
中央の御免札の文字
許可を得てほしい意味
江戸時代に相撲興行を行う
事柄に幕府の許可を得る
ことを掲げていたこのなごり

江戸時代
日本中からカシの人をあつめて
見せ物としての相撲が行われる
ようになった。
相撲は人々の大切な娯楽の
ひとつとなった。



江戸から東京へ向かう
東海道の起点である日本橋

江戸東京博物館



東京大学発の先職集団
のズラリとコッパに展覧会
650kmもはなれた
場所からこのかまで
江戸までの自分たちの
たいいんたあ

美作国津山藩(岡山県)藩主大名行列のとき使用したもののモデル
江戸時代 諸大名には**移動時代**が義務付けられていた。
原則として陣交替 江戸と自分の領地を行き来する
妻子は江戸に住まわせた
江戸から遠い領地の大名は駕籠に乗って何日もかけて移動する
大名行列で移動するには多くの費用がかかった。



多くの見物人を集めて入場料を取った



江戸相撲に関する資料

☆分かんなくて
多々の見物人がひのきまて
盛況な様子分かる



江戸時代の商売についてのコーナー
江戸の町は外食文化が盛ん
だからお店も充実していた。
独身男性は日の外食で食事を
まかなっていたようす。



子どもの遊び場
目黒の目黒
相撲でもおもしろ
相撲の人気の高さを

見立て番付

番付は江戸時代中期に登場した。
当時の最高位の大関をはじめとして
カシのランクがひと目でわかる番付表は
庶民におもしろかられた。
役者などの人気番付や場所の人気番付など
いろいろなランクが番付表で楽しまれた

魚類方の大関にめざしいのし
横綱を小結にきんひごぼう
と書かれている。 **あしひら**



そは屋→移動式
真ん中の棒をかきながら移動して
屋台を開いていた
サイズ 160cmくらい
大きなくてコンパクトに
まとまっている
江戸の町では店を構えない
屋台スタイル

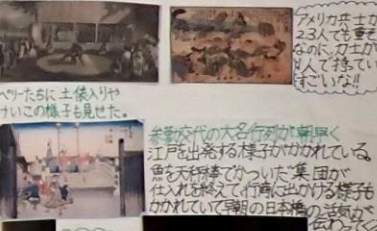


今のおれの起源を語られる江戸前ずし
おれ屋さんの屋台
おれ=高級なイメージ
江戸では押し食べられるファーストフード



アメリカへのお土産物として用意した
200俵の木俵をカシ25人、運んだ
米俵を軽やかなカシたちの足は
ペリ-たちをおどろかせた。

17世紀前半から日本→外国との交流をほとんどしていない 鎖国
1853年 **ペリ-**の来航が日本の開国を求めた。できた。
日本のカシたちが相撲をとる様子を見ました。



ペリ-たち土俵入り
けいこの様子も見ました。

赤香について
現在→多くが米から作られる赤香
江戸時代→香料が作られる赤香
安からたので赤香は重宝されていた
赤香 変色の香を上手に使う人
江戸まで持ってきたことがはまり
半田にあるミツウの創業のきかり
つづいたとされている
食文化の歴史もあふと風流な
おれは今さらで買わたり大きい!!
おれは江戸から売られてきたものだから



江戸時代の香
枝を削り先をたいて
木の端を削り
使用した香が
香を使用し日本

感想 活気あふれる江戸の人々の生活を楽しく体験できました。

三河地域と相撲の関わり

江戸相撲 地元の人々があこがれていた江戸を頂点に全国的な広がりをみせた素人相撲。はじめて江戸幕府は各地で行う相撲興業を禁じた。→ついでに強い力士が江戸に集まることは幕府に相撲興業を届け出制にし、開催を認めるようになった。→ついでに地区ごとに相撲興行を取りこぼす競争が激化した。

でも庶民の相撲に対する熱意は高まるばかり。相撲観戦は庶民の楽しみ。そこで幕府は相撲興業を届け出制にし、開催を認めるようになった。→ついでに地区ごとに相撲興行を取りこぼす競争が激化した。→ついでに地区ごとに相撲興行を取りこぼす競争が激化した。→ついでに地区ごとに相撲興行を取りこぼす競争が激化した。

江戸城ではじめて大相撲が開催された **寛政の上覧相撲** 寛政3年(1791年)6月

江戸城の吹上御庭で14代将軍家齊の臨席する上覧相撲が行われた。

谷風、小野川、強豪力士の奮闘も登場した。將軍が観戦するに値する格式を相撲が備えていた事が天下に承認された。

江戸城で開催後大相撲が人気となり2年後の1月場所を担当し権進元になったのが西尾市出身の**清見瀧**(よしみたけ)

1741年西尾市相見町で産まれた江戸相撲で相撲を取っていた三段目力士が引退するとすぐ親方となった。相撲興行についての才能があったのではいぬと言われている。引退後、現役時代の四股名のまま親方になっている。現役時代地方興業の権進元を務めた。今の相撲界では考えられないようなこと。

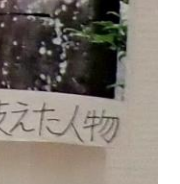
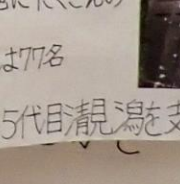
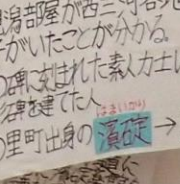
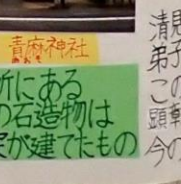
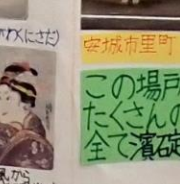
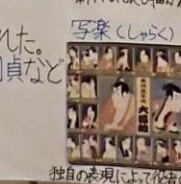
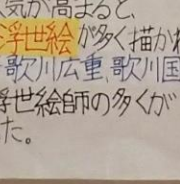
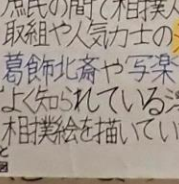
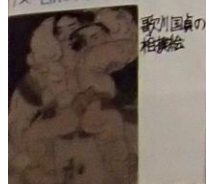
当時の権進元は各親方が交替でやっていた。収益はまず親方に入り、残り有難い親方が競って行った。清見瀧なら、本場所の権進元を担当しても成功するだろうという期待があったのかもしれない。

幕末には5代目になった清見瀧 地元の出身者(碧南市) 3代目清見瀧の弟子 → 相撲協会のNO.3になったかなりの実力者 とくに三河地域から土地相撲の顔役をたぎって頭取免許して育成してそれをさらに拡大したのが5代目清見瀧

育成招 この地域での興行ができる この地域の若者も集まる。有望な人は江戸へ出ていく

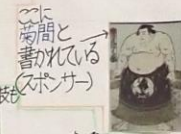
だから5代目清見瀧のころは多くの弟子に恵まれた。 3代目の頭取育成策を継承して 地方での興行と人材発掘を活発に行った。

役者絵と並んで大人気だった相撲絵 江戸時代に興行としての相撲がさかんとなり庶民の間で相撲人気が高まると、取組や人気力士の**浮世絵**が多く描かれた。葛飾北斎や写楽、歌川広重、歌川国貞などよく知られている浮世絵師の多くが木目梨会を描いていた。



清見瀧

江戸相撲に果たした役割は大きいと感じました 素人相撲といっても開催するには幕府藩の許可と江戸相撲との関係が必要だった。代々この地方の相撲興行をとりこぼした清見瀧の資料も残っています。



長野県諏訪市 諏訪大社上社本宮

3年前の旅行で とつよ



大相撲史上最強の力士 雷電 右衛門 1767~1825 信濃(長野県)出身 無内勝率96.2% 24勝10敗 身長197cm 体重169kg 張り手武器に大活躍

安城市 宿聖町 神職神社



三河山惣兵衛

1789年に福富前生まれ。少年時代から体格がよく正義感も強かった。清見瀧又市に弟子入りし、十四まで出世した。引退後依願取(たびごと)となり大相撲の地方興業をすることになる。四本柱免許が与えられた。明治用水の計画をつつた郡築弥屋の警護をした。 名匠絵師 歌川広重(たのむらじ) 歌川国貞(たのくにさだ)



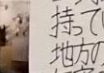
安城市里町 音内神社

この場所にある たくさんの石造物は 全て基礎が建てたもの

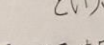
免許



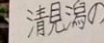
三河山惣兵衛の引退後、相撲協会と関係の四本柱免許が与えられていたから相撲大会をやるのができた。



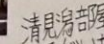
三河山惣兵衛の引退後、相撲協会と関係の四本柱免許が与えられていたから相撲大会をやるのができた。



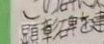
三河山惣兵衛の引退後、相撲協会と関係の四本柱免許が与えられていたから相撲大会をやるのができた。



三河山惣兵衛の引退後、相撲協会と関係の四本柱免許が与えられていたから相撲大会をやるのができた。



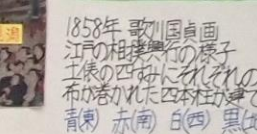
三河山惣兵衛の引退後、相撲協会と関係の四本柱免許が与えられていたから相撲大会をやるのができた。



三河山惣兵衛の引退後、相撲協会と関係の四本柱免許が与えられていたから相撲大会をやるのができた。

今も昔も 清見瀧

1858年 歌川国貞画 江戸の相撲興行の様子 土俵の四本柱がそれぞれの方角を示す 布が巻かれた四本柱が建てられている (青南 赤南 白西 黒北)



柱を背に勝負検査役 年寄の清見瀧、秀の山、追手風ほか人が描かれている。土俵の上で取り組が行われている。

・土俵の周りには他の参加力士がいる。 ・周囲には小屋がつくられていて、たくさん見物人がいる様子が見える。 ・相撲興行が気だたことか分かることか分かる絵。



屋形を支えた四本柱

勝手に建てることで大きな力がかかるとよくわかる

江戸相撲の年寄であった清見瀧又市が免許したことを表している。

三河地方の相撲興行に強いいきょう力を持っていたことがわかります。地方の木の祭りの奉納相撲でも、江戸相撲の年寄の免許がないと柱を建てることかできなかった。ということを実際に見学できました。

5代目清見瀧の功績をたたえた頭取碑 清見瀧の死後 弟子たちが建てたもの。

清見瀧部屋が西三河各地にたくさんの弟子がいたことがわかる。この碑に建てた素人力士は77名 頭取碑を建てた人 → 5代目清見瀧を支えた人物



気は優しくて力持ち 安城出身の大相撲力士 瀧碓又七



1856年 安城市甲町生まれ
本名 柳又七 1867年 12歳ごろから 瀧碓又七という四股名でアマチュア相撲を取り始めた。
26歳 大相撲三段目まで昇進(初土俵からわずか3場所)
しかし不運にも若狭土俵で空中に倒れ、28歳で引退した。
引退した瀧碓はこの地方で有名な尾張の國一官初の浅井森医院の治療を受けた。

三河地方の港町
酒味噌醤油などの特産物を江戸に運ぶための荷物の積り場に集った力士たちが集まっていて、車相撲が盛んだった。

先祖が戦国時代にかつやくした森欄丸の兄弟の末裔に当たる尾張藩一の大地主。父が外科の医師を家業としていた。

江戸時代初めから医者をつとめた名家
院長 森林平 相撲取りが大々びて力士からは治療費を一毛も取らず
帰りの旅費まで与えて優遇した。

体が一倍大きくてご飯たくさん食べるので、参行人には扱われなくて相撲を取らされるのがふつうの時代だった。相撲を取ってればご飯を食べられる。

屋敷には相撲取りが治療を受けたために相撲取りだけが寝起き相撲部屋があった。

3年治療してけがは治った土俵に上がって相撲を取ることはできなかった。相撲取りをやめると飯が食べられなくなる。大部分の相撲取り引退後、用心棒やクサになることがふつうだった。森院長の進めもあって薬を売る行商になった。

明治24年10月 マグニチュード8.0の濃尾大地震のとき偶然病院にいた瀧碓の足が悪く膝蓋に刺さった森院長をおんぶして逃げた。震源地に近くけががふざさんいて2000人以上を治療したと言われている。命の恩人の瀧碓に浅井虎葉の三河地方での独占販売権を無償で与えた。

1885年 安城市里町の自宅に店舗 **瀧碓薬館** を構えて浅井膏葉の行商にはれた

浅井万金膏 といふ薬が調べた 先祖がツリに教えてもらったと言われている。うちみくし肩のこり、その他何病にでもすべて痛むところによしの名女句で有名な膏葉だった。

1931年 76歳で亡くなる

薬の行商で三河各地を回り相撲興行の代理人としても活躍し目を成した

相撲取りだった瀧碓は名前がよく知られているので行商販売は順言だった。次第に手を広げて、大車にのみりを立てて三河国数十か村を行商した。瀧碓は教育を受けていなかったが、頭の回転もよく、いつもおもしろいことを言って人を笑わせていてユーモアがあったのでこの村に行っても大歓迎されたようです。膏葉の代名詞売れに売れていた商品だった。

1897年 助から恩を受けた人などの石碑や石像を薬の行商をしながら建て始めた。今でも瀧碓が建てたと言われる石の碑や石像が残っている。

今のワロンバとエシキヤンなどと痛み止めのセテス、ナシヤンなどを全てあわせたくらいよく知れた薬だった。



安城市里町 瀧碓又七旧宅 となり

地蔵尊
毎年お盆にはお地蔵さんの縁日としてお祭りをしていた。楽しみのない時代に見物人で大混雑し東海道の両脇にはお店が出て通行も出来ないほどのにきわいたそうす。

森医師から受け取った恩をも感謝してここに分かりました。中には浅井万金膏の古い看板がおさめられていました。



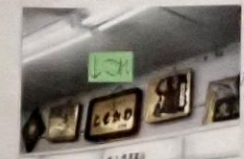
今池町にある瀧碓家の病院。名前の由来を質問したら、もともと瀧碓と再婚高野科卒業後、瀧碓の行商の手伝いをして、大阪の産屋で奉行して、船医として薬師の免許を取って安城に移ってきた。瀧碓の世話で安城駅東に瀧碓薬局を開いた。(1917年)

安城市 御幸本町 山口旭薬局

胃腸強壮力かもの金看板 昭和初期に新発売になった薬。元式屋主が山口旭薬局と分る膏葉の看板

山口旭について

父 山口佳太郎 二男として生まれた。母 米田さゆり 母は瀧碓の再婚相手。高野科卒業後、瀧碓の行商の手伝いをして、大阪の産屋で奉行して、船医として薬師の免許を取って安城に移ってきた。瀧碓の世話で安城駅東に瀧碓薬局を開いた。(1917年)



金看板 ひざをまくと10~15年でびびり、金ばくもぐり、破れてほう、現まで残っている金看板はとても貴重。店内は明治大正時代の金看板や写真、印刷用道具などがたくさんかざっており見せてもらいました。



瀧碓又七のことがおもしろい。瀧碓又七のことがおもしろい。瀧碓又七のことがおもしろい。

瀧碓力士像
高さ 94cm 幅 43cm
25年ほど前に作られた。元々は瀧碓の相撲の時の姿を写したもので、その下には四本柱があり、その柱には台座がある。

浅見瀧又七の石碑
1900年に建てられているので、それの後に建てたもの。

森林平の石碑
58歳で亡くなり、20年経たずに建てられた。

瀧碓の石碑
瀧碓の相撲や相撲取りの歴史を伝えるために建てられた。瀧碓の相撲の姿が刻まれている。



このように変わってきたのかを調べていくことが楽しい研究でした。

相撲の世界には独特な言葉や言い回しがあり知らないうちに暮らしになじんでいる言葉もある。

白星・黒星

勝負に勝たら白星
負けたら黒星と言う
相撲の星取表に
勝った場合に白い丸
負けた場合に黒い丸を
入れることからきている

金星

横綱と三役以外の
幕内力士が横綱に
勝利すること
かちんこ
真剣勝負

勝ち越し

白星の数か黒星
よりも多いことをさす
幕内十両の場合
8勝以上を上げると
勝ち越しという

痛み分け

取組中に力士が
負傷し相撲を
続けることが
できないときに
行司が勝敗を
引き分けにすること

土がつく

相撲で力士が
負けること
決まり手
勝負を決めたときの
技のこと

揚げ足を取る

相手の言い間違い
などをとらえて
責めたりからかったり
すること
八百長
八百屋の長兵衛(通称八百長)という人が
相撲の親方と暮を打つ時に手加減して
適当に勝ったり負けたりしていたことから

勇み足

土俵際まで
攻めこんだのに
先に足が出て
負けになること

序ノ口

入門したばかりの
力士のスタートの
階級であることから
物事の始まりを
さす
書ききれないほど
他にもたくさんあります

わきがあまい

わきをしめる技術が
低い相手に攻め
られやすい状態
そこから慎重さが
たりずつけまされ
やすい様子のこと

思ったこと

こんなに相撲用語が
日常語になっているのは、
長い歴史と伝統のある相撲が
昔から身近な存在だったのだから

相撲がなぜ日本の国技といわれるのか

1909年に東京両国に天気に関係なく興行ができる施設が建てられた。この施設の初興行披露状に文士の泣見水蔭が書いた「角力は日本の国技である」という言葉から相撲が日本の国を代表する競技であると意識されるようになった。



東京・両国に完成した国技館
(今は旧国技館と呼ばれている)
ドーム状の屋根
13000人の観客を収容できた



今池町丁目
ハマカリの名前の
ついた建てるもの
看板と同じ字の
呼称と書かれていた
薬局で買ったら
身内のびたのもたぞです



研究を終えて

相撲には長い歴史をもつ伝統的な競技であり神様にささげる行事として行われていることが分かりました。土俵入り番付表化粧廻し鬘着物取組などのさまざまな動作がきびしく決められていて、それぞれの動作に深い意味がこめられていることが分かりました。言葉や文学美術などに映りこみ暮らしに深くなじんで相撲が身近に感じられる魅力があったと思います。

安城市里町旧東海道沿いには一か所にまとまってたくさんの相撲関係者の碑があるのは全国にここだけだと言われている場所もあって古くから日本人が愛してきた相撲を受け継いで守ろうとした人がいたからだということを知りました。きびしいけいこをくり返しやることで力がついて精神もきたえられ日々積み重ねることで強い力を生み出すことができて世界中にファンがいる大相撲のことを知れました。長い歴史と文化のなかで伝統文化がうんとつまっていて調べていくうちにどこかにつながり、どのように変わったのかを調べていくことが楽しい研究でした。